サックリ文化の変容
—三国を中心とするサックリの分布と系譜からみた—

山　崎　光　子

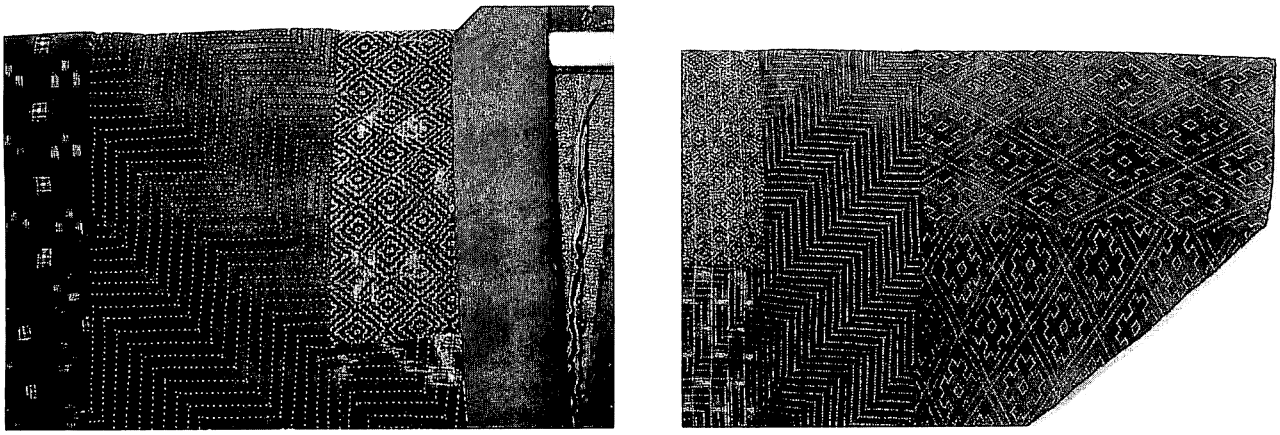

図1　三図のサックリ〔刺子〕—みくに龍翔館—

1．はじめに

三国（福井県坂井郡三国町）には華麗な刺子衣群があり、サックリと呼ばれている（図1）。三国は景勝地（東尋坊）として有名であるが、その地の刺子衣の存在はこれまであまり知られていないようにみえる。三国のサックリは仕事着である。紺木綿や紺絣地に、いろいろな模様を白糸で効果的に配して刺し縫いしてあり、時には茶色糸の模様が紺地の上でオレンジ色に映えた美しい刺子衣もある。刺し方は、袖の表布のみに精緻な模様をすくい刺ししたり、また、身頃のみに裏面の布目がみえなくなるほどびっしりと太い刺し糸で埋めつくした刺子などもある。

刺子とは、もともとは衣料の乏しい時代に衣類を長持ちさせるための繕い刺しである。かって、封建体制下で女たちは、過酷な労働の中で、たくましく生きながら、衣類の機能性を満たしてなお美しさを求めた刺子文化を各地に生み出してきた。しかしこの三国の刺子にはその機能性から微妙にずれた刺子美の追求の仕方があった。それらが好事家の関心を呼んだものであろうか。三国の刺子衣は第二次世界大戦後、大量に買い集められ、その出自や呼称は明らかにされないまゝ、古美術商や蒐集家の手に収まったものと思われる。今日、国立民族学博物館や石川県立歴史博物館にも三国のものと思われる刺子衣群があり（図2・図3）、滋賀県の文化芸術館でも三国らしい刺子衣群の特別展が開かれた。いずれも三国のサックリとは知れないまゝ美的に評価されている。

筆者は、三国のサックリ文化を調査し、まとめる機会を得たが、近隣県のサックリの呼称の分布やその素材を調べているうちに、各地のサックリはそれぞれの地域の人々によって習得、伝達された生活様式の中から生み出され、その共有する文化領域によって異なるサックリ文化を形成しているらしいことがわかった。ここではそのサックリ文化の地域による変容について概観し、若干の考察を試みた。

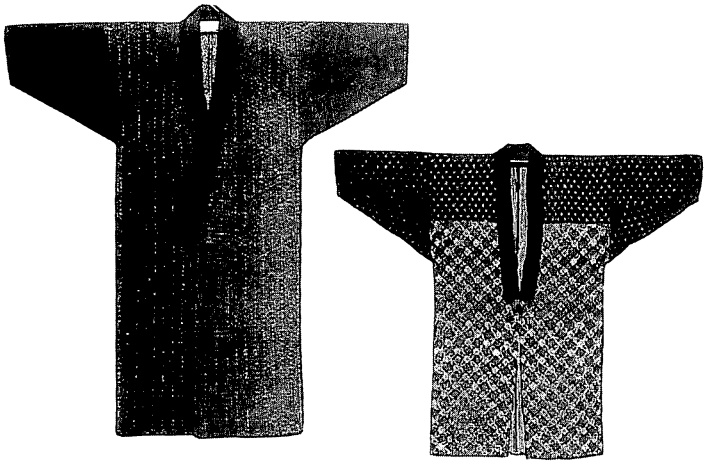

図2　国立民族学博物館の刺子『日本の労働着』[1]

2．サックリの呼称の分布とその素材

ところで、サックリは三国の刺子衣にかぎってつけられた名称ではない。サックリとそれに類似した名称は、仕事着全般に対する呼称であり、福井県を中心とする日本海沿岸から中部地域の山間部にまで分布している[2]。しかし、サックリと呼ばれる仕事着の素材の大半は三国のように刺子ではなく、裂き織りが多い。

新潟県については、日本海航路とかかわりの深い佐渡の島にサックリ類の呼称がみられ、そして佐渡の一村においての

やまざき　みつこ
県立新潟女子短期大学
〒950—21　新潟市坂井砂山1—19—19（自宅）

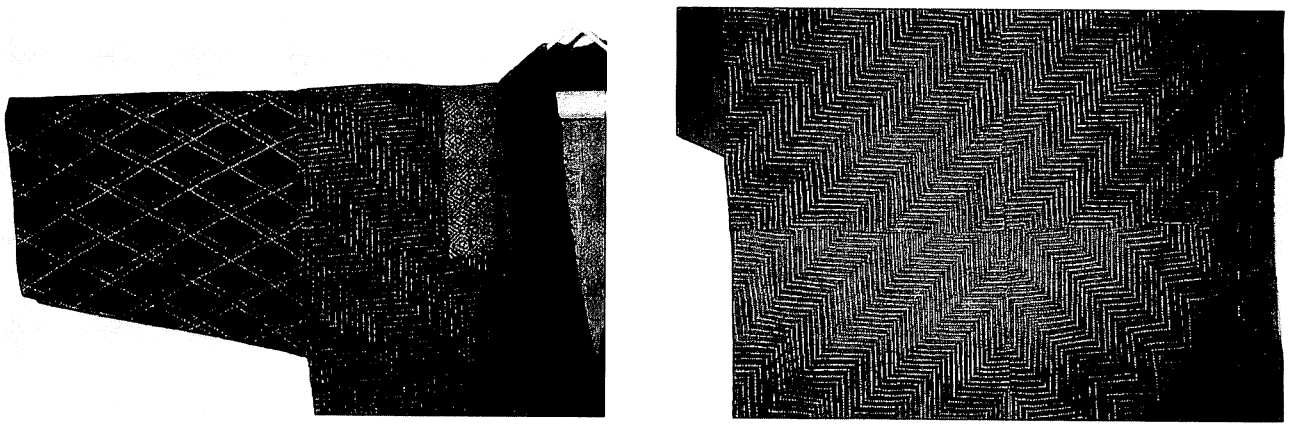

図3　三国のサックリに類似した刺子―石川県立歴史博物館―

み、三国のように刺子の仕事着がサックリと呼ばれている。

三国の近隣地域のサックリの呼称と素材の分布を図4－1・4－2に示した。順次各地のサックリ文化の様式についてさぐってみたい。

(1)　福井県のサックリと滋賀県琵琶湖畔のシャックリ

福井県やその周辺地域の仕事着には“サックリ”の付く呼称は多い。特に福井県についてはサックリは多く、オクソザックリ・ノノサックリ・モメンサックリ・ヌノサックリ・シロサックリ等と、大半は素材や色の名称が冠してあり刺子ではない。

日本海に沿って南下した小浜市周辺に至ると、シャックリ・シャッキョリという呼び名もあってまたおどろかされる。このシャックリとサックリは、越前から小浜経由で大阪を結ぶ江戸時代の交通要路だった滋賀県の琵琶湖周辺地域にも見られる。

(2)　京都府日本海沿岸のサッコリ

日本海沿いに福井県と隣接する京都府の丹後半島や由良川周辺ではサックリよりサッコリが多く、またサッキョリ・サキョリなど裂織布を連想させる呼称もあった。それはやはり木綿の古切れを裂いて緯糸替わりに織った裂織衣などであり、刺子衣はサックリと呼ばずにサシコ・ドウジなどと呼ばれている。[6)7)]

(3)　石川県のオクソザックリ

ところで、福井県の北側に隣接する石川県の県境周辺にもサックリの用語はのこっている。特に両県にまたがってオクソザックリの呼称が多い。このオクソザックリは石川県も能登半島の珠洲市周辺ではマグササッキリなどと呼称が変わるが、いずれにしても、かっては苧をとった後の苧屑を織り糸として使用していたらしい（図5）。

もっとも白山麓（石川県石川郡白峰）ではカナジャックリ・モッコジャックリ・シャックリバト・シャックリブトンなどとそれぞれにシャックリの名が多用されていたことが、石川県立白山ろく民俗資料館の資料でわかるが、これらはいずれも裂織りである（図6）。今日でもカラフルな裂織のシャックリバトがつくられ、紬工房で販売されている。刺子は輪島市では、サシコ・サシコボットなどと呼ばれている（図7）。

(4)　新潟県佐渡を中心とするサシコ

佐渡郡の相川地区ではサッコリのほかサックリ・サッキリの呼称ものこっている。しかしその大半は裂織で相川郷土博物館の柳平則子氏によれば、稲鯨という土地においてのみ刺子をサックリと言っているという。一般に刺子したものはゾンザといい、紺木綿糸で細かく横刺ししてある（図8）。

佐渡の小木町宿根木地区には見事に刺された刺子が多い。紺無地に白糸で横刺ししたもので、裾まで付いた長い衿の下部や巻袖の下部に縦刺が配されることもある。中には珍しい洋服形の白地に黒糸で模様刺しした船夫用のサシコもあった。しかし小木にはサックリに類する呼称は全くなく、ゾンザあるいはサシコと命名されていた。ここには、三国と同様

マグササッキリ（珠洲市）

サックリ（石川郡河内村板屋）

図5　石川県のサックリ類―石川県立歴史博物館―

アッシがのこされている。小木は西廻り航路の要所であり北海道との交流も深い（図９）。

新潟県の越後側は元会津藩だった一部地域をのぞいては、ぼろ布を重ねて繕い刺したドンザ状のものはあるが模様に刺した刺子衣は少ない。時折、日本海沿いの地域に立派な模様刺しがのこされているが大半は西廻り航路に関わって移入されたものである。その一つとして柏崎市のサシコをあげておく。その文様を松前刺しと呼ぶなど北海道との関わりを強く印象づけるが、またコンペイトウ刺しの名もあるなど、海路を行き交う外来文化の波が感じさせられる（図10）。

３．三国のサックリの系譜

サックリは本来なにを意味しているのだろうか。今でこそ、サックリの素材の種類が云々されるようになったが、近年、諸調査によって全国の実態が明らかになるまでは、サックリに近似した語は単純に裂織（サキオリ）として処理されてきた。古木綿を細かく裂いて緯糸替わりにして織った裂織は全国に広く分布しているからである。これは図11にみられるような、江戸期の貴重な輸送機関だった北前船によって、京阪地方からの古木綿が各寄港地に運ばれたためであろう。この西廻り航路は、繁栄した三国の港を通じて、三国のサックリにどんな影響を与えたのだろう。

福井県のサックリは嶺南と南北で大きく分かれる。敦賀市立歴史民俗資料館の垣東敏博氏によれば、嶺南地方でサック

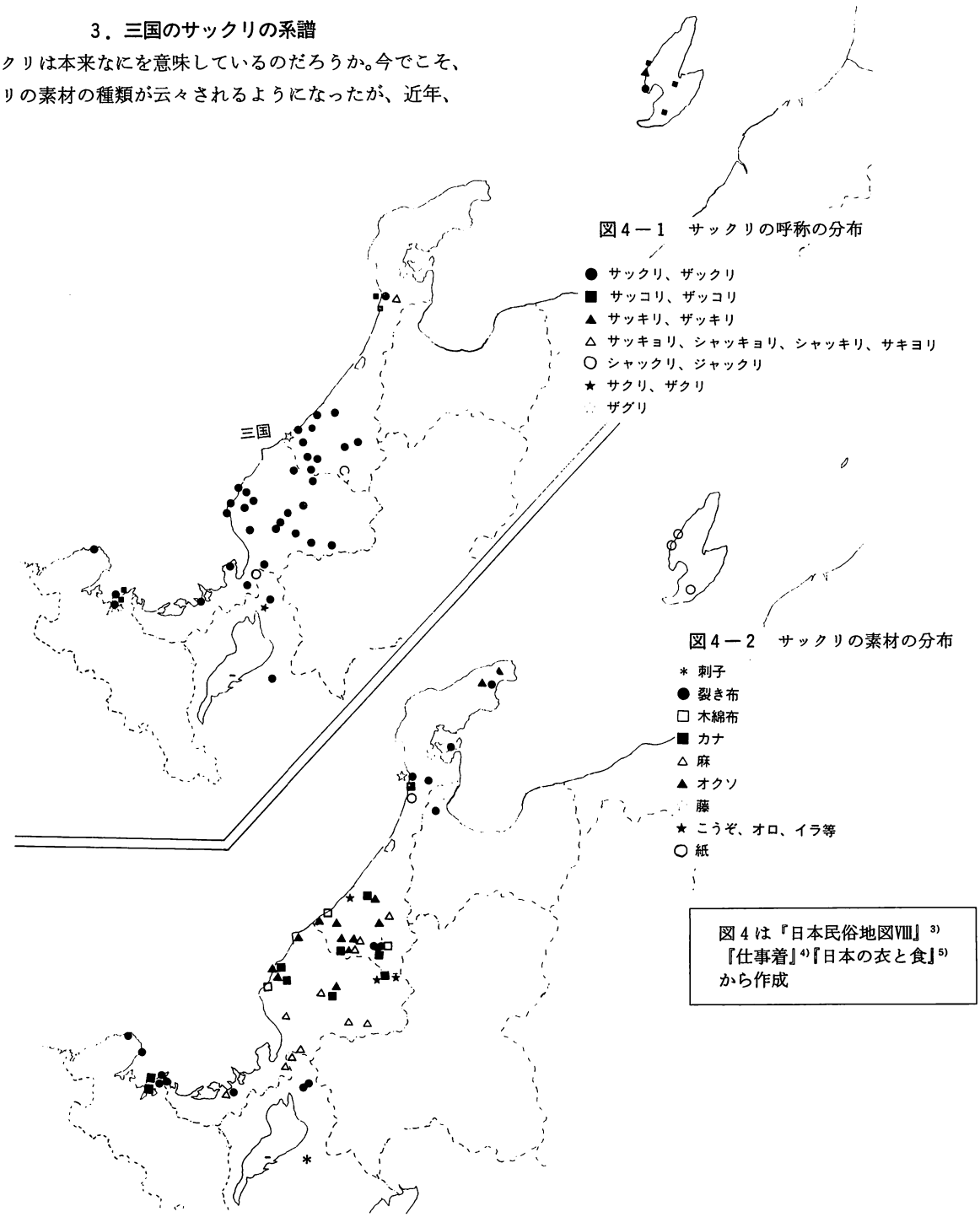

図４　三国の近隣地域のサックリの呼称と素材の分布

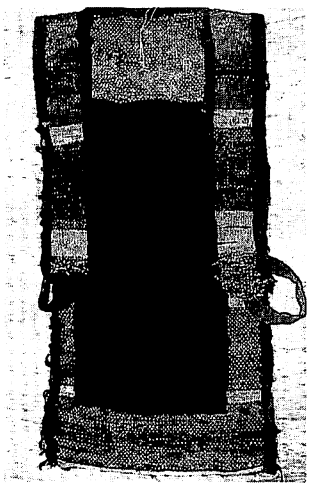

図6　石川県白山麓（白峰）のシャックリバト〔裂織〕
―石川県立白山ろく民俗資料館―

図7　石川県輪島市のサシコボット〔刺子〕
―石川県立歴史博物館―

リといえばその裂織をさす。しかし嶺北地方に裂織はほとんどみられず、経緯とも麻糸のものや、経糸は麻で緯糸は木綿糸のものなどであるという[9)10)]。そして他に類例の少ない三国の「刺子」のサックリが加わる。

越前のサックリにかかわる最も古い記録は、正徳2年自序（1712）の寺島良安の『和漢三才図絵』[11)]の越前国の土産の項に、割布（サキオレ）とあることであろう。江戸中期にすで土産の一つに数られるほどになっているが、これは刺子ではなさそうである。

時代は下るが、明治5年（1872）の『足羽縣地理誌』[12)]足羽縣編の「阪井港国産輸出ノ大概」の項に「裂織五千枚許」とあり、「特産　織物類」の項に「裂織布丹生郡大野郡処々製作ス」と記されている（図12）。

明治期までの主要な交通は水運で、九頭龍川は大きな船が往き来していたが、溯った上流の川からは筏によって薪なども下流におろしており、三国への重要な流通経路となっていた。丹生郡や大野郡で織られた裂織が、河口の阪井港（三国港）に五千枚も集められ出荷したものであろう。

その裂織の語は通称どのように読み、何を素材としてつくられていたのだろうか。

福井県立博物館の坂本育男氏の民俗調査によれば、丹生郡や大野郡には布を裂いた裂織のあった形跡はないという。サックリは仕事着の呼称であるほか、麻糸だけの織物で、それほど地厚でないものでもサックリと呼んでいるということで、サックリの原初的な形が浮かび上がって来る。

しかし「特産　織物類」の項には、木綿縞や布（麻）もあげられているから、裂織はそれら以外の特殊な織物を示すように思われる。

坂本氏の下一光の調査では、サックリというのはほとんどオクソのサックリで筏師がよく着ていたといい、旧川西で現

図8　新潟県佐渡郡相川町のカタイレゾンサ〔刺子〕
―相川郷土博物館―

図9　新潟県佐渡郡小木宿根木のサシコとゾンザ〔刺子〕
―佐渡国小木民俗博物館―

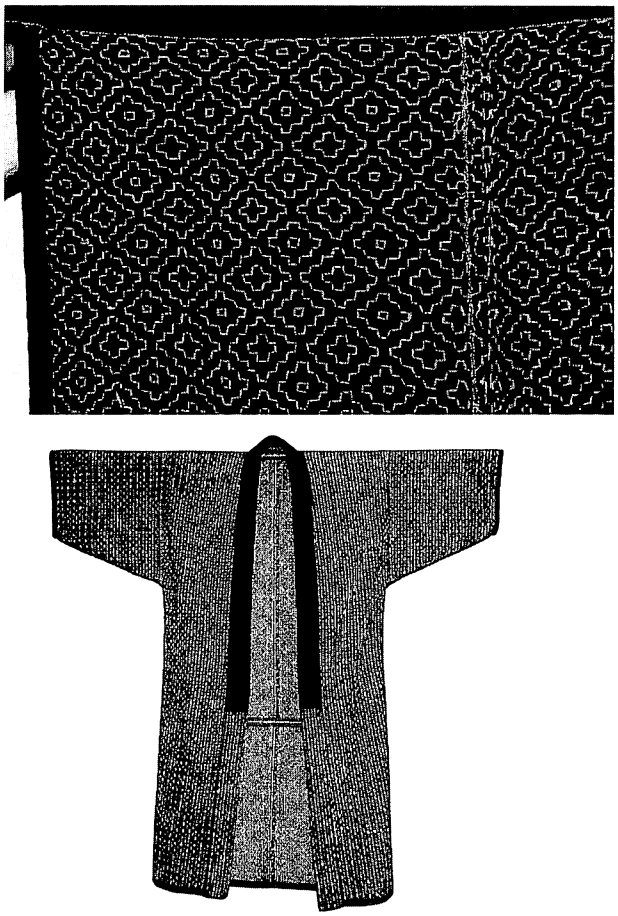

図10　新潟県柏崎市のサシコ
松前刺しの前掛けとコンペイトウ刺し衣〔刺子〕
―柏崎市立博物館―

福井市本郷の七瀬川の中央の谷のあたりの人が三国の米納津へ着て出て来ているという。また、足羽郡の美山町の民俗資料館には、今も白のテッポ袖のオクソザックリが残っている。

明治45年（1912）の『福井縣坂井郡誌』[13]の「産物織物」の項に、「海濱の特産として麻織物の一種　苧屑裂織（俗にサックリと云う）なるもあり價低廉にして耐久性に富み職工其他労働者の需要多かりしもこれ亦今はなし」とあり、苧屑裂織もサックリと呼ばれていたこと、裂織という字が布を裂いた織物に限るものではないことがわかる。

明治末期にはすでに衰退してしまったが、丈夫なオクソザックリの需要はきわめて高かったようであり、明治初年の「裂織　五千枚許」がオクソザックリとしても、容易にうなずけるのではないか。実際、河口の三国町の、旧町内からやや隔絶した雄島地区の突端の安島―ここは三国の刺子のサックリの発祥の地といわれているが―周辺では、かつて漁師がオクソサックリやオクソの前掛けを用いており[14]、その苧屑のつくり方でさえも現在の古老たちの記憶の中によみがえらせることができる[15]。

ところで、三国のオクソザックリの存在を側面から裏づける紀行文が江戸中期に遠い青森で書かれている。『菅江真澄遊覧記』[16]である（図13）。

天明8年（1788）ころ、津軽領の根岸（またの名を根楯）

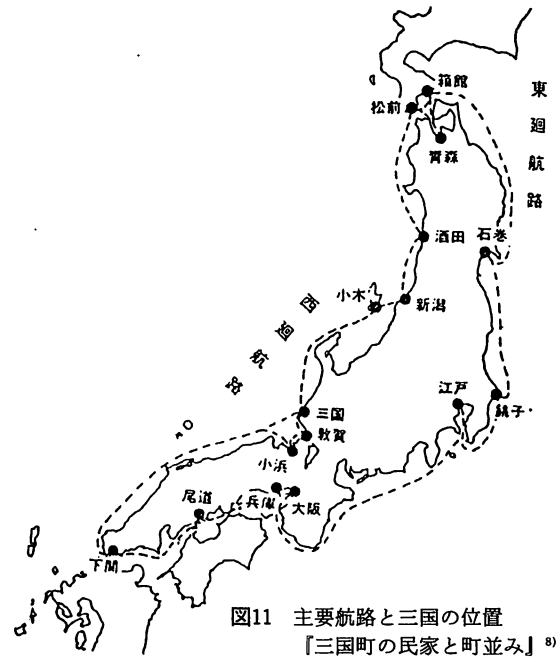

図11　主要航路と三国の位置
『三国町の民家と町並み』[8]

では、「男は漁を業とし、女は裂織といって、麻苧の糸をたてぬきにした毛布のような厚織りを織った。これは新保裂織（シンポサキオリ）（越前の裂織）というものに似ている。この浦人は越前の国のなんとかいうところから、来たものというから、さもあろう」とある。さらに菅江真澄は、再び他地域の麻苧裂織（いとさきおり）という厚く織った布に対比して「津軽根子の浦では麻屑織（いとくずおり）という」と書いているから、これはオクソザックリとみられ、青森と福井の三国港の河口にある新保とを海路で直接結ぶ線があったことになる。

津軽領はコギン刺しのメッカである。この遊覧記には、天明5年（1785）の津軽領における記録に「縹の布麻に背中のあたりばかり太い白糸で模様を縫取りしたもの」、「あや模様に刺しこんだつづれ」、「麻織りの刺子にした着物」、「きれいに刺し縫いしたサナダ」そして「さくおりというみじかい衣服をき」など三国の刺子のサックリを彷彿させる文字が並ぶ。三国のサックリの系譜を解く鍵は、案外このようなところに隠されているのかもしれない。

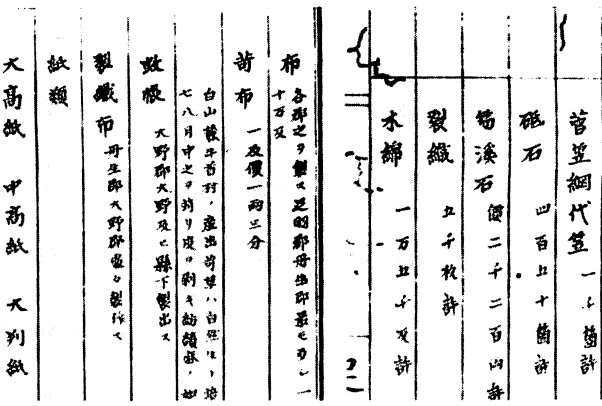

図12　『足羽縣地理誌』
（国立公文書館所蔵）

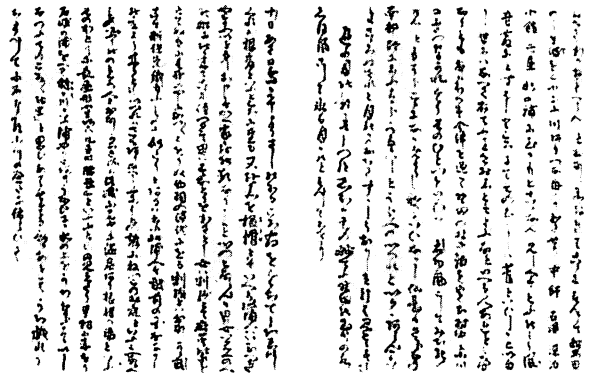

図13　『菅江真澄遊覧記』
（写本　秋田県立図書館所蔵）

港町として栄華を誇った旧三国町内には、「北」との関わりを偲ばせるアイヌの樹皮衣の無地のアツシや、縞のアツシに類似した粋なサックリが、残されている。

4．サックリの文化様式の変容

三国のサックリと呼ばれている仕事着は刺子衣である。模様刺しの刺子衣は全国的に点在しており、三国の近隣地域にも刺子衣はあるが、これまでみてきたように刺子衣でサックリと呼ばれているものは三国のほかはきわめて少ない。

一般にサックリに類する呼称をもつ仕事着の多くは、古木綿布を細く裂いて緯糸代わりに用いたいわゆる裂織衣とされよう。しかし、古木綿布の流布が、江戸後期から明治初期にかけての日本海航路を往き交う北前船によってもたらされたものであることから、「裂織」以前の織物が問題視されてきた。

そして本稿においては、裂織以前のオクソサックリの存在が、三国にかかわるサックリ系譜を通しながら、若干明らかになったのではないかと考える。

ここでは細部にわたって資料を提示する余裕をもたなかったが、サックリの素材の分布図でもわかったようにその変容の形は必ずしも一律ではない。そして三国においては、オクソサックリから裂織のサックリを経ることなく刺子のサックリへと変容している。

文化様式の転換について、Cレヴィ＝ストロースは、インデアンの仮面の例から一つの法則性を導き出している。すなわち「一つの集団から他の集団へと造形的な形が保有されるときには、意味上の機能は逆転する。反対に意味上の機能が保有されるときには、造形的な形の方が逆転する。」[17]というもので、これについては、装身具史に関してその方法論の援用を試みたことがあるが[18]、このことはサックリの文化様式においても、ある程度あてはまるのではないだろうか。このサックリについては、仕事着という同一の機能を保持しながら、名称や素材のバリエーションに富んだ転換が随所にみられた。

他地域との交流によって異文化を包摂し、もとの文化の型に変化を起こす文化変容が、三国を中心とするサックリ文化においては、陸路を結ぶのではなく、航路を通して飛翔するところにその特異性があるのかもしれない。

本稿は、三国町郷土資料館（福井県坂井郡三国町）の第11回特別展「三国のサックリ展」（平成6年10月28日～11月2日）開催のために筆者が作成した図録『三国のサックリ』の中「サックリ文化の不思議－そのひろがりとルーツをめぐって－」の項に大幅に手を加え、補筆、改稿したものである。

本稿の執筆のための調査・写真撮影（平成6年7・8月）に際し、御高配頂きました次の方々に厚く御礼申し上げます。三国町郷土資料館々長ならびに濱田由紀子氏をはじめとする館員の諸氏、福井県立博物館坂本育男氏、福井県立若狭歴史民俗資料館垣東敏博氏、京都府立丹後郷土資料館井之本泰氏、石川県立歴史博物館北沢寛氏、石川県立白山ろく民俗資料館々長、佐渡国小木民俗博物館中堀等氏、相川郷土博物館柳平則子氏、佐渡郡相川町佐藤利夫氏、佐渡郡金井町三川義則氏、柏崎市立博物館三井田忠明氏、青森市稽古館田中忠三郎館長・飯田美苗氏、県立新潟女子短期大学長井久美子氏。

引　用　文　献

1）中村たかを編　『日本の労働着』252～257・266～280 源流社　1987年
2）脇田雅彦「サックリ考(一)・(二)」『民具マンスリー』16巻10・11号　1984年
3）文化庁編『日本民俗地図Ⅷ－衣生活－』国土地理協会 1982年
4）『仕事着－東日本・西日本－』平凡社　1986・87年
5）『日本の衣と食』明玄書房　1974年
6）京都府立丹後資料館編『刺子と裂き織り』1982年
7）京都府立丹後資料館編『収蔵資料目録』3集　1987年
8）三国町教育委員会『三国町の民家と町並』6頁1983年
9）田中敏博「福井県のサックリ」『福井県立博物館紀要』4号　1991年
10）『福井県大百科事典』福井新聞社　1991年
11）『和漢三才図絵』東洋文庫　平凡社
12）足羽懸編『足羽懸地理誌』1872年（国立公文書館所蔵）
13）福井県坂井郡教育会編『福井懸坂井郡誌』1912年
14）三国町史編纂委員会『三国町史』870頁　1964年
15）山崎光子「三国のサックリの多様性とその生活文化」『民俗服飾研究論集』8集13頁　1995年
16）『菅江真澄遊覧記』東洋文庫　平凡社（写本　秋田県立図書館所蔵）
17）Cレヴィ＝ストロース　山口・渡辺訳『仮面の道』128頁　新潮社　1978年
18）山崎光子「装身具史にみられる形態や素材の転換とその意味一方法論援用の試み一」『家庭科教育』61巻1号67-71頁　1987年